

## 美術の窓(23)

## 中国絵画展によせて

大和文華館館長 吉川逸治

李朝屏風展の次に、館蔵品の中国画展を催すことになりませんが、小品ながら国宝、重文級の優秀な作が陳列されますので、宋代から明清時代にいたる一貫した中国絵画の特色がいささかでも窺見することが出来るかと、学生時代から西洋絵画の伝統を学んできた私自身、期待しています。中国絵画の展覧は、もちろん、いくたびか見ましたし、博物館などの常設陳列でも時折、気をつけて見学しますが、その度に日本絵画の伝統や、雰囲気と余り異なるので、東洋に帰ってきたという心安さを感じられず、緊張と努力とで疲れはてます。

例えば、牧谿など、大徳寺の白衣観音、猿、鶴の三幅は見れば見るほど、その深い世界にびっしりと捉えられ、眼が吸いこまれ、全体から細部まで、揺ぎない明暗調の墨色を作る形の微細な変化、転調、展開に魅了され、鶴一幅で、くたくたになります。これほど微細に墨一色の明暗調が的確に、一つの小宇宙を作り出す画家の技、ことにそれを支持、指導する思考力の緻密な粘り強さに圧倒されますし、その意志力、忍耐力、一口で言えば、集中的な精神力に打負されるのです。彼の視覚像が、亡霊の如く、画面を忘れさせて、顕現するのです。精神力がここまで到達すると、視覚像が霊像となって、神秘性を帯びてきます。レオ

ナルド・ダヴィンチの最晩年のサンタ・アンナの傑作(岩窟の聖母、ロンドン、ナショナル・ギャラリー蔵)の微妙なスフマートで仕上げた画境を想起させます。もう、透視図法の科学性とか、色調の周到な法意など、忘れさせて、直接、画像の顕在に打たれます。

館蔵品では、国宝の李迪の雪中帰牧図が、かかる宋画の境地の一端を示すものかと存じます。描かれた対象の描出、場面の設定、構図の適切など、もちろん申し分なきもので、これらすべて満たすとも、アカデミックな佳作とはなっても、まだ気韻生動の条件を満たさねば、画像は画面から独立した霊像となりません。しかも、作品に靈気を感じるや否やは、鑑賞家の精神が画家のそれと共鳴するところまで鋭敏でなければならないと存じます。

中国の画人は宋代以来、画をおのれの小宇宙像として、筆を手に思考を凝らし、墨色を整え、体験したところを統一する精神力の所産として画を構成する。中国絵画は、南北朝の模索、創意の時代を経て、隋唐の時代に古典美術の域に達し、人物、山水、樓閣、花鳥の諸類に涉って、物質的外形、外觀を粗相なく描写し、かつ、偉容整然と構成することを習熟し、唐宋五代には一時、逸脱抽象に走るものも出するほどの画域の広がり



観音猿鶴図(三幅対) 牧谿筆 大徳寺蔵

に戻り、さらに唐朝古典主義から、精神性の充実を求めて、写実の純化、緻密化を求めるとともに、写実に則しながら視覚像をおのれの小宇宙として確立する画派が生まれる。

その後、中国絵画における一種の好き意味でのバロック傾向、あるいは純古典傾向とも称すべき傾向へ展開する。レンブラントが、中国水墨画の趣きを試みたデッサンありとのこと、明代に至り、東西相ともに、時に多彩、緻密な写実画を好み、時に単調、暗調の精神画を好むところも興味引かれる。

日本も、唐朝絵画の豊かな影響の下に白鳳天平時代から古典絵画の習練を積み、人体デッサンも遠近空間構成も自然主義に基づいた描写と構図の整った絵画芸術を展開し、仏画に、絵巻物、装飾画と多方面に渉る制作を産む。その中樞は、仏教的制作であり、また装飾絵画も宮廷的生活儀礼と結びつ

いた制作であるから自ら、両者ともに共通した性格を有し、唐朝伝来の古典様式を絵画の画面の平面性を尊重し、色彩効果や構成効果を強調する平安朝絵画を産む。この絵画の写実的役割より造形性を主張する傾向は、後に、桃山時代の極彩色障屏画や、特に江戸時代の浮世絵版画の発展に有効な影響を及ぼすことになる。

日本絵画の平面性とか装飾性と称する写実性に対する欠陥性は、却って近代絵画時代になって、顧みられることになる。そして、絵画の平面性とか色彩性、人物・顔面の型などは、中世絵画の特徴として西欧美術にも共通するところで、ステンドグラスや織物画、モザイク画が盛行する中世西欧絵画でも装飾性は避けられない。却って、日本絵画よりも徹底している。また、吹抜屋台の如き構成も、西洋古代絵画にも中世絵画にも類似の原形がない訳ではないが、西欧



岩窟の聖母 レオナルド筆 ロンドン



芥川図 宗達筆 大和文華館蔵

中世絵画では、わが絵巻絵の如き奥行ある空間構成への関心が稀薄だったからである。

西欧でもステンドグラスやモザイク画盛行の時代が過ぎる十四世紀から、古代古典絵画の遠近関係ある自然主義の様式を顧みて、プロト・ルネサンス絵画が現れ、これまで教会堂建築の空間構成が荷ってきた神の宇宙像が、透視図法の法則をもつことによって画家個人の視覚像を保証することになる。眼は神の宇宙像を把握する。忠実に眼の観ることを描出することが、キリスト教徒たる画家の基本的仕業になる。ルネサンスの美術家、理論家によって基礎づけられた数学的透視図法に拠る絵画が十九世紀の半ばすぎまで続く。これを崩壊させるのが、モネが大胆に創始する専ら光の現象に基づく絵画であって、この印象派の運動の発生から展開に終始、北斎はじめ浮世絵版画家達の色彩法と庶民的リア

リズムが少なからず影響を与えることは周知のところである。

中国画は気韻生動の鑑賞を志すのに対し、これとは対照的に当館蔵の宗達の芥川図が好例ではあるが、日本絵画は情操や感覚を結晶するオブジェとして画像を鑑賞するのである。印象派以後の美術は両者を結合し総合して創作しようと心がける。

季刊 美のたより No.79

昭和62年 5月14日

発行 大和文華館